

春はいまだし

佐々木 鏡 子 秋 田

夕しぐれ

伊 沢 玲 千 葉

しんしんとしばれる夜はホットワインレンゲの花の蜜などいれて  
深芹の白き根つこにみどりさすときを待ちをり春はいまだし  
さくさくと葉味の葱をさざむたび根深といひるし父思ふなり  
雪なんて自然にとけるさほつとけと物知りがほの晚白柚いふ  
亡き夫と露の臺つむゆめをみつホットワインのききめすばらし  
両親も夫もゐない新年は(残生元年)クールに生きむ

妙さんが待つ

中津川 靉 坐 埼 玉

ゼームス坂

近 藤 哲 夫 神奈川

遠き山の墓を厭ひし妻おもひ新墓成せり徒歩五分の地  
水雨ふる師走の墓地の石室いしむろに遺骨いしほねの妻をしづかに鎮む  
(石室でねむつてゐてもきこえます子らの足音あなたの靴音)  
『埼玉は晴れ』読みました何だかね恥づかしいけど嬉しかつたよ  
日課なる散歩のゴールは霊園の9列3番、妙さんが待つ  
万年を妻とねむらん縄文の遺跡の上のこの石室で

最愛の母はも逝けりしもつきの晴れたる空にしろくも浮く日  
小春日の雲に似てゐる母だつた少し離れていつも笑つて  
秋草にうさぎの跳ねる手塩皿じふまい遺したらちね逝けり  
気がつけばすでに盛りをすぎてをり駐輪場のわきの山茶花  
うすべにの山茶花散りて母のをりし施設の部屋にもう母はをらず  
夕しぐれ母の介護に悔いなしと言へぬわたしを濡らしてゆけり  
跨線橋のある町がすきほらあそこちびまる子ちゃんが道草してる  
廃線をちびまる子ちゃんにをそはりぬ訪はんとしたる清水港線  
たそがれを細身の少女入りゆけりゼームス坂のKUMON教室  
ゼームス坂病院跡地の一角に智恵子等身「レモン哀歌」の碑  
ガス工事のわかき監督手をあはす大井三ツ又古りたる地藏  
隠しごとすくなき一生ひとよとおもひしが寒満月に照らされひるむ

つめたき膚

斎藤美衣 神奈川

弥生の甕

黒石 孝新 潟

下茹では不要と書かれたこんにやくを信用しきれず茹でこぼす朝  
雪平にこんにやくふる煮えてあるこの世のことはすべてまぼろし  
夢のなかまだ考へてある半分の鶏もも肉を明日どうするか  
ありませんといふ顔をしてバスに乗る狂つてしまふほどの妬みは  
サンドイッチの耳切り落とすとき誰かわれのうなじをすうと撫でたり  
腑を持たぬ玻璃器さびしゑ いちぐわつの朝日につめたき膚はださらして

絵を観るやうに

中村敬子 東京

四十年

横山裕子 富山

あさがほが好きだつた宵つ張りの母へ朝子への朝が戒名にあり  
父がゐる母がゐる日の冬空とけふの空なにが違ふのだからう  
木枯らしにうづまいてゐる竹林の若竹古竹いつせいに撓ふ  
銀色の枝にひかりの花咲けりサクラはさくら真冬も桜  
アレンジの主役となつたかすみ草シアン、マゼンタの水吸ひあげて  
この歌はゴッホで次はフェルメール絵を観るやうに歌会はずすむ

捨てられし船荷眠らせ風ぐ海の水中遺跡の古代はるけし  
漁場深く沈む水中遺跡から揚がる弥生の泥色の甕  
〈海揚がり品〉なる壺の珠洲焼に描かれてそよぐ秋の七草  
経の壺、骨壺あまた眠らせて海は禁漁俗世を容れず

午前四時新聞配達の軽トラがバックで入りぬ路地の迷路に  
二階の灯ともらぬ家が増えて冬パンダのみなくなつたニッポン  
眼を病むと文字整はぬ賀状来ぬかつての〈残留孤児〉恵子さんより  
満州より引揚げの途次出産せる母さんと赤子の死を見し八歳  
中国に残留四十年母国の地踏みて四十年恵子さん生きる  
神話では七人姉妹の「プレアデス」和名「昴」のまたたく寒夜  
小説を書けなど無理も言ひし友のけふ一年忌 ぼたん雪降る  
すみれ色の夕空あふぎ幾人の亡きひと想ふこころ専らもはに

伊吹嵐

吉田 美奈子 愛知

父に抱かれて

才野 洋京都

藪の木はしだるるほどに珠実つけ木下あかるし小鳥を呼びて  
 一羽発つはづみに棟の枝ゆれて残る幾羽がその揺れ楽しむ  
 きりきりと百舌が高枝で鳴く朝あしたよはひが一つわれに積みたり  
 伊吹嵐どんどろどろと吹きつのりだあれも来ない誕生日です  
 おあつらへむきに雪など降りこぬかわが誕辰の夜をひとり酌む  
 夜の雪のとばりの向かうのまぼろしは何者なりし 呼べばよかつた

時間をしまう

船岡 みさ\*三重

地球じまひ

則武 博子 兵庫

限りなく欲しい何かがあるような若さの残滓を見る誕生日  
 エンジンをかければ日付を言う音声感情のなき「メリークリスマス」  
 夜になる前暗みゆくひとときの心細さを夕暮れと呼ぶ  
 ずつしりと重くとろりと味は濃く新年祝う義父の干し柿  
 徳利をしまいきやき鍋しまい家族集いし時間をしまう  
 車窓より見ゆる景色に太陽光パネル増えおり令和八年

参道をよちよち歩く幼子に歩幅合はせて歩く母親  
 幼子が父に抱かれて鈴の緒を両手でエイと振る初詣  
 肩車されて幼児は父親の帽子の代はり演じあるなり  
 若者のピンクに染められぬる髪の付け根に見ゆる黒みづみづし  
 春近き工事現場を囲みぬる壁に蝶の絵チューリップの絵  
 改札を人の通らぬひと時を春近き野の風通りゆく  
 歳旦の朝やけ空にながれる海の彼方に戦火は消えず  
 核じまひ戦いそじまひをなさざれば地球じまひの日も近からむ  
 本年も戦後と呼ぶる世を願ひ年のはじめの朝刊ひらく  
 国交の埒外の面おもてあどけなし母国に返され笹食むパンダ  
 喋りつつ棺に入らむと漫才師 うたを詠みつつ入りたしわれは  
 墓じまひ賀状じまひしおせち購ひスマホ片手に年あらたまる

鬼柚子

瀬尾

恵\*鳥取

塩気がうれし

吉里 幸雄 福岡

庭の木にわんわん実るおにゆずは大きほんぼり冬をあかるむ  
となり家にあげれば一軒また一軒こえ聞きつけてええ柚子だいな  
鬼柚子がわたしにくれるがいな役むらの人びとよろこばせたり  
散らかった靴箱のうえ葉のついたゆずを飾ればさらに散らかる  
へふたつほど風呂に浮かべて入らあかそこにたしかな亡き祖母の声  
鬼柚子は鬼か柚子かと問うならばザポンのなかまそれなら鬼だ

いとこより送ってきたる梅干しの赤紫蘇漬けの塩気がうれし  
土の鈴、石の文鎮、どんぐりのそれぞれに冬の光のしづけさ  
まねをして使はなかつた裏も洗ふ土佐のひのきの一枚俎板  
おろそかに卒寿と言はねどかなしみの凝りが咽喉をすぎし思ひす  
しぐれゆく籠に今しともしたりたる灯りまたたくおぼつかないに  
鉛筆を削りし木の香かくはしくしづかに遠き除夜の鐘の音

耐久年数

入江朝子\*福岡

風格を見ず

江頭洋子 長崎

寒風の掃き清めたる並木道さのうと違う足音がする  
枯れ枝の先ごとごとく力もつ桜並木の一月の空  
四十年住みしこの町新しき家並ありて道に迷えり  
道ぞいに明るく建ちしコンピニのうしろ姿はひっそりとせり  
坂道を行き帰りするわが家なり運転止めて知る八田台  
リフォームを終えて自分とこの家の耐久年数など思いおり

野母崎の山のなだりの水仙群かぜにすんすんよろこびて揺る  
冬枯れのわが庭さきに灯りつつおとろへ知らぬ南天、方両  
半世紀わが家と在りし檜の木にあまたの苔は風格を見ず  
忘れないやうに暗証番号を子のパスデーに決めて正解  
パンツ丈三年前に三センチ詰めてことしは二センチとほほ  
高校時女子百人中十三人昭と和のつく名前であった